



サバイバルゲームへの誘い

会員 豊川 祐行 (69期)



「ヒット!!」

今、紳士のスポーツ、「サバイバルゲーム」がじわじわと流行の兆しを見せている。

今から6年ほど前、私もそんな流行の篝火に身をくべた暇な大学生の一人であった。

ある日のこと、大学を留年し日々非生産的な営みに明け暮れていた私に、友人から「会社の人たちでサバゲーに行くことになったけど、一緒にどう？」と声がかかった。

何となく話には聞いたことがあったが、大の大人がエアガンでの撃ち合いなんて肉体面のみならず精神面でも痛いのではないかと、所謂オタク層の方々しかなくて気まずいのではないかと、そもそも遠出するのがめんどい、などと不安は絶えなかったが、意を決して参加を決めた。

当日、約束の駅前で待っていると友人の会社の方々で迷彩服にジープでお出迎え、縮こまる私を席の真ん中に乗せると山道を走り出す。

さながら捕虜の気分で戦場（フィールド）に到着し、車を降りると、ざっと見て100人はいようかという人たちが、色とりどりの迷彩服に身を包み、それぞれの愛銃を肩からぶら下げて、非日常的空間を作り出していた。

暫くまごまごしながら待っていると、フィールドの管理者からルール説明が始まり、ちょっとしたアイスブレイクを経てゲーム開始。手渡されたレンタルの電動ガンを抱え、戦術も何も分からないが、とりあえず皆について山道を全力ダッシュで駆け上がる。

ほどなくして相手チームとの接敵。フィールドに設置された遮蔽板、塹壕、ちょっとした小屋に各自が散らばると同時に、激しい銃撃音が森林に轟く。

私も見よう見まねで小屋に避難し、中の小窓から顔を出そうとした瞬間、待っていましたとばかりに無数のBB弾が飛んでくる。慌てて首を引っ込めると、小屋の壁を通してバチバチバチ!!と恐怖を煽る衝撃が全身に響いた。

「こわっ!!」

思わず口をついて出た言葉に、ベテランの香り漂う先客が反応する。

「合図でいきましょう。俺がカバーするんで、突撃任せます。3, 2, 1…」

唐突な指示に戸惑う間もなく、もうここまで来たら行かねばならぬという使命感のようなものが肩を押す。

「GO!!」の合図と共に、その先客が小窓から大型銃を覗かせ発砲を開始すると、私も小屋の横から飛び出し、敵陣近くのついたて目がけ腰をかがめ全力で銃弾の嵐の中を走り抜ける。

奇跡的に被弾せず辿り着いた遮蔽の先10メートルほどの位置に敵を発見し、1対1の撃合いが始まる。引いたら負ける——どこに眠っていたのか、私の闘争心に火がつき、お互い一步も引かない攻防の末、私の弾き出した弾が敵のヘルメットにヒットした。

小屋の先客は無事なのか。そう思い後ろを振り向くと、彼もまた被弾し、銃声に勝るとも劣らぬ「ヒット!!」のコールと共に、小屋を後にするところであった。

戦場を後にするその後ろ姿から、彼は私の方を振り向き、グッと親指を立てる。

「相棒」——私も無言で親指を立てると、次なる攻防に備え銃を構えた。

ゲーム終了後、休憩所では勝敗の発表、次のゲームまでの歓談タイムが始まる。

相棒は…射撃場で黙々と銃の調整をしていた。一言礼を言おうと駆け寄り、話しかけると、「こちらこそ、さっきのは楽しかったですよ」と紳士的な笑顔。

その日が終わる頃には体はクタクタに疲れ、翌3日ほど全身筋肉痛を被ることになったが、この日以来サバイバルゲームは私を虜にしてやまず、結局もう一年留年した。

最近はサバイバルゲーム界隈も、初心者歓迎のムードがあり、私のような新参者でも一瞬で入り込むことができる「紳士のスポーツ」として密やかなブームが起きている。

小さい頃河原で銀玉鉄砲を撃ち合ったあの経験。そんな思い出にどこか心くすぐられるものがある方には、是非一度お近くのフィールドに足を運んでみて欲しい。